

草に
祈る



る祈に草

著 温忠井 櫻



昭和二年十一月十五日發行
昭和二年十一月十五日發行
昭和二年十一月十五日發行

草に祈る 定價 八十錢

著者 兼 發行人 印

櫻井忠溫

印刷所

大阪市北區中之島三丁目三番地

大阪朝日新聞發行所
大阪市北區中之島三丁目三番地

複製を許さず

發行所

大阪市北區中之島
三丁目三番地

株式會社

朝日新聞社

は し が き

「草に祈る」は朝日新聞社の厚意により、古戦場の夏草を踏んだ昔思ひ出の記録である。

若い士官であつた私は旅順で盲滅法に剣を揮り廻した時があつた。それからもう二十三年といふ日がたつた。

血に浮いた山々谷々をたづねて行つた時、私は昔のこころを思ひ出して涙を啜つた。

一塊の土にも靈あり。一幹の草にも魂あり。私はそこに佇んで、亡き人々のために黙禱を捧げた。

「草に祈る」は卑著「肉弾」の新生篇として「肉弾」を完成するものと思つて

る。

「秋風録」は「草に祈る」の姉妹篇であつて、残壘から探し得た種々相を描いたものである。

「滿洲通路」はこの旅行の一つの記録である。

「前肉弾」は陣中で書いた短篇で、「肉弾」の前篇とも見るべきものである。

「草に祈る」の出版に方り、始めて之を發表することにした。

これ等の數篇が出版さるゝに至つたことは、私の限りなき喜びであつて、朝日新聞社の厚意を深謝して止まぬ。

装幀と挿畫とは私の拙ない手に成つたものである。

昭和二年晩秋

著者しるす

目 次

草に祈る.....	一.....一六八
一、旅に出て.....	三
二、蛸.....	一二
三、めしやの前.....	二〇
四、波止場鴉.....	二七
五、老刀牌.....	三四
六、野の音楽.....	四〇
七、てい子さん.....	四七

八、拾ひもの……………	五七
九、仇 同 士……………	六四
一〇、砲 彈 の 殻……………	七一
一一、二人の屯長……………	七八
一二、一 軒 の 家……………	八五
一三、なつかしの家……………	九二
一四、小川のほこり……………	九九
一五、草 茂 る……………	一〇六
一六、五 日 月……………	一二二
一七、宿を求めて……………	一二九

一八、昔したやうに……………	一二五
一九、葛の葉……………	一三三
二〇、土一升骨一升……………	一三八
二一、吾亦紅……………	一四三
二二、夢……………	一四九
二三、二十三年……………	一五三
二四、聖旅順……………	一五八
その夜のこと……………	一六五
秋風錄……………	一六九
一、旅順戦の映畫……………	一七一

二、古 井 戸	一七七
三、引上げの日	一八二
四、ある小僧	一八七
五、戀の要塞	一九二
六、墓 守	一九八
七、愛する人	二〇三
八、蠟 燭 の 火	二一〇
九、旅 行 弾	二一五
一〇、砲臺から接吻	二二〇
一一、牛のやうに	二二六

滿洲遍路……………二二三……………二七一

白服の人……………二三五

芝居……………二四三

私のために……………二四九

黒煉瓦の家……………二五九

前肉彈……………二七三……………三〇七

南方を睨み……………二七六

鮮血を浴び……………二七八

四面皆敵……………二八三

風雨の中に……………二八五

勇士の死	二八七
人肉の罐詰	二八九
別れの盃	二九五
血の池地獄	三〇一
最後の記録	三〇六
装幀並に挿繪	櫻井 忠 溫

(巻頭寫眞)

最近の櫻井忠溫大佐とその自署
出征當時の櫻井忠溫少尉

草
に
祈
る

一、旅に出る

船まで持ち越した水虫が黃海へ入つても癒らない。指のまたに大きな堀割がある。そこから血が浮いて来る。それでゐて船の中はよく歩いた。

食堂へは出たくなかつた。ふだん讀みたいと思つた本をかなり澤山鞆につめて來てゐるので、それを讀むだけでも、三日や四日の旅では少くないくらゐなのだから、食堂で長尻の御つき合ひなどはしたくなかつた。しかし酔つてゐると思はれるのもいやだから、こも角も出ることは出た。

食堂では幸ミ、だれこも口を利く機會がなかつた。ものをいひさうにして何もいはないですんでしまつた。私の席の向ひに新婚らしい若夫婦がゐた。細君こ

いふのがこてもシヤンで、丸々した振ひつくやうな女であつた。細君は主人公の註文するものと同じものをこつて食つた。主人公がカツレツを食ふに、細君もカツレツを食つた。クルミを割るに細君もクルミを割つて、旨まさうにもない顔をした。お睦じい仲である。

香港丸の船長はこいふに、並の人の三倍もあらうこいふ體をしてゐる。名からして宮野鼻こいふお相撲のやうな名を持つてゐる。宮野鼻さんがゐるので、搖れないこいふ評判の船ださうである。

こきく下の部屋から團扇太鼓の音が聞えた。見るに若い坊さんが、人の迷惑もかまはず、太鼓を叩きくお題目を唱へた。

この坊さんが門司を立つ時、見送りの連中が、ランチの中から團扇太鼓を叩

きく送つた。この坊さんも甲板に立つて合奏しつゞけた。

××教のある學校の一行が乗つてゐた。朝になるに、肴の鱈を動かすやうな手つきで、手の平を返し／＼何かしら唄つた。

この一行が私に講話をしてくれさボーイを通じていつて來た。私は講話などいふものをしたくなかつた。その内教師いふのが來て、京阪へお出での節は是非お立寄がねがひたい、先日しも下村海南さんがお出でになりました。などいつて、私に名刺をくれた。それには權大教正××××あり、傍に×××町にあった。

私は×××町に聞くに、身の毛のよだつところがある。京都にゐる時、友人が日の丸の扇子で躍り／＼×××町の方へ走つていつたところがある。その途中を巡

查がつかまへて、××まで連れもどつた。それを私が京都から迎へに行つた。汽車に乗せた時、Sは常人に變らなかつたが、フト私に「妻はもう自殺したでせう」といつたので、ビツクリした。

その日からSは本物になつてしまつた。その上細君まで狂ひ出し、二人して競争で踊つたり、はねたり、眞つ裸になつてやるので、まきもに見てゐられなかつた。

その上、夫婦して子供を井戸に吊り下けて殺してしまつたといふ慘劇さへ演じた。その後間もなくSは心臓麻痺で死んでしまひ、妻君は鋏で髪を滅茶苦茶に刻んだりしたが、どうなつたか、其後トンミ消息を聞かなくなつた。

だから××町ミ聞くミ、S夫婦のこゝを思ひ出して身震ひする。